

令和8年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【西原小学校】

①	今年度の目標と学力向上策
重点的に育成する 資質・能力	(1)基礎的な知識・技能の習得と、継続的に学習に取り組む力 (2)自分に合った「学び方」を身に付け、自己の学習を調整することができる資質・能力 (3)文章の要点を捉えて正確に読み取る読解力と、根拠を明確にして説明する力
次年度に向けて	↓
実施する学力向上策 【時期・頻度】	(1)授業の最初に前時の学習を振り返り、既習事項を生かして本時の課題を設定する。【毎時間】書き込み式のドリルやAIドリルを活用するなど、一人ひとりの課題に合わせて反復する時間を確保する。【週に1度】 (2)学習のめあてや方法、進め方を自分で選び、自分の学び方についてふり返ることができる時間を設定する。【毎時間及び単元末】 (3)語彙指導や音読を基盤とし、叙述に基づいて考える発問や要約活動、説明活動を行う。【各単元の中で1回以上】継続的に読書に取り組ませる。【週に1回】

⑤	年度末評価結果分析(2月)
学力向上策の実施状況	評価(※) ②詳細分析(学年・教科担当) ③分析共有(児童生徒の実態把握) 職員会議・校内研修等
①目標の達成状況 ②学力向上策の妥当性	↓ 結果提供(2月)
今年度の成果と次年度の課題	さいたま市学習状況調査(学力) <小3～中3>(1月)

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

④	さいたま市学習状況調査結果の分析
特徴的な結果	学力向上策の充実 ①学校全体での取組 ②単元↓テスト・定期テスト等の分析・活用 ③中間評価を経ての取組 ④調査結果を活用した授業
結果から考えられる児童生徒の実態	

②	全国学力・学習状況調査結果の分析
特徴的な結果	・国語では、「話すこと・聞くこと」及び「書くこと」の領域において、全国平均正答率を上回った。一方、「言葉の特徴や使い方に關する事項」及び「読むこと」の領域では、全国平均正答率を下回り、課題がみられた。特に、「学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことができるかどうかをみる」問題に課題がみられた。また、国語の理解率は全国平均と比較して高い傾向がみられた。 ・算数では、「図形」及び「変化と関係」の領域において、全国平均正答率を下回り、課題がみられた。特に、「立方体の体積の求め方について理解しているかどうかをみる」問題や、「百分率で表された割合と比較量から基準量を求めることができるかどうかをみる」問題に課題がみられた。
	↓
結果から考えられる児童生徒の実態	・「国語算数ともに」、「教科の学習が楽しい」「学習が得意である」「学習したことを普段の生活の中で活用できる」といった質問に対する肯定的な回答の割合が、全国平均を上回っている。本校では、学習のめどや方法などを児童自身が選択・決定する自由や自主性の授業を実施しており、主体的な学習の実現につながっていると考えられる。その一方で、漢字の習得や計算技能など、継続的な積み重ねや反復を必要とする基礎的・基本的な内容の定着には課題がみられる。今後は、児童の主体性を生かした学習を継続しながら、基礎的・基本的な知識及び技能の確実な定着を図るための指導の充実に努められる。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一步)

③ 学力向上策の実施状況	評価(※) B	・学習のめあてや方法、進め方を児童自身が選択し、自らの学び方について振り返る時間をおおむね設定できている。一方で、学習成果や課題を共有する場の充実に向け、効果的な実施方法について校内研修を進めている。 ・読解力や根拠を明確にして説明する力の育成については、国語科に限らず様々な教科において学習活動の機会を設けている。しかし、継続的・系統的な指導として定着させるまでは至っておらず、各学年や教科をまた一貫した取組の充実に課題となっている。
学力向上策の見直し	④	・書き込み式ドリルやワークに加え、↓から導入したデジタルドリルや「キュービナ」も活用しながら、児童一人ひとりの学習状況や課題に応じた反復学習の時間を確保し、基礎的・基幹的な知識及び技能の確実な定着を図る。 ・読書習慣の形成に課題がみられることから、おやすみの本や読書活動の時間や機会を増やして実施し、児童が本に親しみ機会を充実を図る。読書の楽しさや力を実感できる体験を通して、主体的に読書に取り組む態度を育成していく。 ・読解力や根拠を明確にして説明する力の向上を目指す。ICTも効果的に活用しながら、各教科において継続的・系統的な指導を推進する。また、協働的な学習や他者の考えを参考にした振り返り活動の充実を図り、多面的・多角的に考える力や表現力の育につなげる。